

世界へ発信！

北の縄文だより

vol.3



～みんなの知らない「JOMON World」～

社会教育課社会教育・文化財グループ (☎ 74-3010)

～知られざる縄文の漁～

1. 入江・高砂貝塚と海

入江・高砂貝塚は、噴火湾を見渡せる高台にあります。今では噴火湾の名産と言えばホタテやカレイがありますが、縄文時代はどうだったのでしょうか。

実は、入江・高砂貝塚で暮らした縄文人も噴火湾の恵みを大いに利用していたことがわかっています。

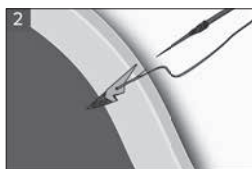
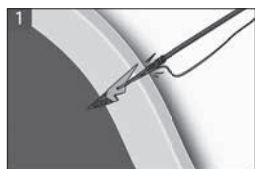
2. 漁の方法は？

入江・高砂貝塚からは、縄文人が食べた魚の骨や貝殻、海のは乳類の骨などがたくさん見つかり、噴火湾での漁が盛んだことがわかりました。入江貝塚からは、縄文人が漁に使っていた道具として、多くの「釣り針」や銚の先に取り付ける「銚頭」が発見されています。

「釣り針」は小ささまざまな大きさがあり、ねらう魚の大きさによって使い分けていたと考えられます。中には組み

合わせて使う釣り針もあり、オヒョウなどの大型の魚をとっていたようです。

「銚頭」は長い棒の先に取り付けて、獲物に突き刺します。すると、先端の銚頭が外れて体の中に残ります。銚頭にはあらかじめヒモが取り付けられているので、このヒモをたぐりよせて獲物をとることができる仕組みです。マグロなどの大きな魚や、イルカやオットセイなどを獲っていたのでしょう。



▲縄文時代の銚頭の仕組み

▲縄文時代の釣り針

3. 材料は？

釣り針や銚頭はシカの角でつくられています。シカの角は硬くて丈夫なので、海での漁の道具に適した材料といえます。このほかに、動物の骨でつくられたものもありました。食料として動物をとって、残った角や骨で道具をつくる。こうしたサイクルを縄文人は長い間続けており、自然と共生した縄文人の知恵を知ることができます。

また、入江貝塚で見つかった銚頭には、先端に石鏃（やじり）をはめ込むためU字状に加工しているものもあります。さらに、よく見ると、斜線や格子状の模様がつけられているものもありました。こうした形や模様を見ると、ただ単に機能によって形作られただけでなく、縄文人の海に対する思いが込められているのかもしれない。



このようなシカの角や動物の骨で作られた道具は、普通の遺跡では長い年月の間に腐ってなくなってしまいます。しかし、貝塚では貝に含まれるカルシウム分が角や骨を腐りにくくするため、5,000年ものものが現在まで残り、今を生きる私たちに縄文の暮らしを伝えています。

あなたのスマホに専属ガイドを！ ミュージアムガイドアプリ「ポケット学芸員」

洞爺湖町の遺跡や芸術作品などをガイドする無料アプリ「ポケット学芸員」が導入されました。入江・高砂貝塚や貝塚館でも展示品について、詳しい情報を掲載していますので、ぜひ、ご活用ください。

導入施設：入江・高砂貝塚（貝塚館含む）、洞爺湖芸術館、洞爺湖有珠山ジオパーク、洞爺湖ぐるっと彫刻公園、中島・湖の森博物館

